



# ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第11号

発行日 2017年11月20日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

## 秋

山霧の速さは音もなく――

秋の色も目隠しされ

一木一草も消えてしまった

わたしは一瞬に霧の底に

凝らした瞳は薄灰色の視程をさまよい

山の輪郭をみうしなつた

わたしは霧を宙に押しあげ

ひらかれてゆくのを待つ

ふいに霧の翼がたたまれ

みずみずしく浮かびあがる秋

葉むらにとけこんでいた緑が跳びはねる

ひんやりとした霧と

孤独なバツタの表情

秋のうしろには白い貌がのぞいていた

くるしみ

目前に険しくそぼだつ岩壁

上は ごつい貌むきだしの黒茶けた懸崖

下は 樹木が覆いかぶさる深い谷

常に滑落する危険

怖じ気づいたわたしは

恐怖に耐え

ロープにすがりつき

恐ろしさを

魂の蝥<sup>はさみ</sup>で撃ちはらいながら横歩き

狭い崖道に足を踏み入れる

これほどまでして

わたしを山に登らせるのはなんだろう

十メートルも進んだらうか

両掌を岩の膚<sup>はだ</sup>に

蛸の吸盤のように付着させ

立ちほだかる魔の誘惑をきく

崖道もあと一足

ほっと気がゆるむ

と

蒸し暑さをかきたてるような蝉の声

いま鳴きはじめたのか

渡りきるまで

声のない世界にいた……

行く手に

微光をちりばめた霧のフィルム

ふと視線を上にもけると

微細にきらめくミストの天の川

かなたには

雲海が

静かにのびやかだ

頂でわたしは

空の上に遊ぶイヌワシになる

いまだにぬぐい去れない記憶

まとわりついて離れない翳が

ガラスの破片のように落ちていく

長年

魂をしめつけている鎖から

解放してくれたのは

ひとつの困難だった



## 兄 II

六月

兄の四十九日で

秋田新幹線に乗る

窓外の景色は

高層のビル街から

いつしか

緑の空間がひろがる田園地帯に

やがて

瞼の裏側を映像がかすめる

あんこ

兄！

寡黙な背中に呼びかける

武骨な兄が

カタン糸のような母の白髪を

縮まった小さな躰を

隅すみまで洗い上げている

兄に抱かれた赤ん坊の母は

湯船の揺りかごで目を瞑っている

耳が聞こえない母は

兄の指先から

情愛を感じ取っていたのだろう

(ありがと)

母の言葉は

春の光が薄氷を割って差し込むように

兄の心を

ふつくらとほころばせた

遠いむかし

兄は

父の鋳型にはめ込まれることを拒み

石の口を閉ざしていた

それでも

父の通夜には

(あやー はっこえいごじど！<sup>\*</sup>)

一晩中

父を抱いて寝た

柔道着姿の遺影の兄は

かすかに笑みを浮かべ

彼岸にたたずむ母を

まっすぐに見つめていた

床を這うような読経の音のなか

兄は両親のいる

慈しみのニワ(作業場)へ駆けていった

\*冷たいこと

## 徒然のエチュード IX

1

山の小咄 ①

(あ 雷鳥！

雷鳥ですよ！

ひとりの男が

話しかけてくる

三人の学生がきた

(雷鳥だ！

(バカだな 山鳥だよ

だよな あのすつきりした脚は！

——ライチヨウ平にて

山の小咄 ②

(絵ハガキありますか?)

(あまり良く撮れてないよ)

ヒュッテの店主は

商売気のない外国人

山の小咄 ③

(あの〜 トイレの水が出ないんですが……)

(あとで見てくださいよ)

立つ鳥跡を濁しちゃった

2

今日のカレーは

肉なしよ

そのかわり

皮肉たっぷり!

3

そのでつかい眼

貸してくれる?

なぜ?

ケアレス・ミス防止よ!

4

言い訳名人の特技は

あのサ〜

それでサ〜

できなかつたの〜

5

腕は確かだが

梯子はのぼれない

高所恐怖症の職人

6

もし熊が出たら

(わだばシネど！<sup>\*</sup>)

と言おうわ

\*かたいから、の意

7

Aさんは声楽家

わたしは食欲家

8

本を読んでいると眠くなる

じゃ〜 眠くならない時に読んだら！

9

食欲の秋

食欲の冬

食欲の春

食欲の夏

10

しゃぶつてみる？

どんな味？

もの足りない？

しぼんでいるからネ

じゃ〜 トウガラシでもぬっちゃおう！

元気百倍のイチゴ

## 【あとがき】

生涯に十七冊の詩集を出版

去る九月二十日、あきた文学資料館において、講

☆秋田との関わり

師に成田豊人氏をお迎えし、「第二回ピッタの会」を開催した。演題は「田中冬二、寺山修司、谷川俊太郎について少し」。参加者は十一名であった。

一八九六年、父親の転勤（安田銀行秋田支店開設の任）で、福島市から秋田市に一家で移る。

三名の詩人の代表的な作品を例にあげて、順次進められた。

一九〇一年、父親過労で急逝し、一家は上京する。約五年間の秋田での生活。

## 一、田中冬二について

☆詩の特徴

一八九四（明治二十七）年、福島市生まれ。  
一九八〇（昭和五十五）年、八十五歳で死亡。

① 典型的な抒情詩でほとんど難解な表現がない

② 郷愁を誘う語句

③ 静寂感に満ちている

④ 旅愁

⑤ 大きな情景と小さな情景の対比

⑥ 西洋に憧れるハイカラ趣味

☆主な詩集

第一詩集『青い夜道』

第二詩集『海の見える石段』

第三詩集『山嶋』



## 二、寺山修司について

一九三五（昭和十）年、弘前市生まれ。

一九五一（昭和二十六）年、青森高校に入学。

「山彦俳句大会」を主催。全国学生

俳句会議を結成。俳句改革運動を全

国に呼びかけた。友人の京武久美と

共に俳句雑誌「牧羊神」を創刊し、

卒業まで編集・発行を続けた。

一九五四（昭和二十九）年、早稲田大学に入学。

「チエホフ祭」五十首で第二回短歌

研究新人賞を受賞。冬、ネフロローゼ

を発症。

一九五五（昭和三十）年、生活保護法にて入院。

病状が悪化し、面会謝絶となった。

一九八三（昭和五十八）年、肝硬変で入院。肺血

症で四十七歳で死亡。

☆マルチな才能を発揮

俳人、歌人、詩人、劇作家、演出家、映画監督、

競馬評論家、作詞家、小説家、俳優など。特に、

演劇の分野での評価が高い。海外でも数多くの

賞を受賞している。

☆谷川俊太郎とも交友があり、氏の勧めでラジオ

ドラマを書き始める。詩よりも俳句がすぐれて

いた。

☆六十年代半ば以降からは、学研の「高三コース」

で、高校生の詩の選者を務めて、多くの若い才

能を掘り起こしたりした。成田氏も愛読してい

た。

☆主な歌集

第一作品集『われに五月を』（一九五七年）

第一歌集『空には本』（一九五八年）

第二歌集『血と麦』（一九六一年）

第三歌集『田園に死す』（一九六四年）代表作

### 三、谷川俊太郎について

一九三二（昭和六）年、東京生まれ。父は哲学者で法政大学学長も務めた谷川徹三。

一九四八年、詩作及び発表を始める。

一九五〇年、父の友人であった三好達治の紹介によつて、「文学界」に「ネロ他五編」が掲載される。

一九五二年、処女詩集『二十億光年の孤独』を出版。高い評価を得る。この後、詩作の他に絵本、エッセイ、翻訳、脚本、作詞等、幅の広い活動を行つてきている。

一九六二年、「月火水木金土日の歌」で第四回日本レコード大賞作詞賞を受賞。

一九七五年、『マザー・グースのうた』で日本翻

訳文化賞を受賞。

一九八二年、『日々の地図』で第三十四回読売文学賞を受賞。

一九九三年、『世間知らズ』で第一回萩原朔太郎賞を受賞。

二〇一〇年、『トロムソコラージュ』で第一回鮎川信夫賞を受賞。

二〇一五年、初めての書き下ろし詩集『詩に就いて』で、第十一回三好達治賞を受賞。

☆成田氏が高校一年生の時の教科書に、谷川俊太郎の「ネロ——愛された小さな犬に」が掲載された。『二十億光年の孤独』は、谷川が高校生の時から書いていた詩の一部を収録したものであると、先生から教わった。それがきっかけで成田氏は、詩に興味をもつたと話された。

\*

講演終了後、詩作技法や詩との向き合い方、例えば、散文詩とはナニ？、詩の切り口、リフレインの効果、題材の見つけ方など、活発な意見交換がなされた。ポエムガーデンでの交流が、この上ない喜びとなった。ご参加、ありがとうございました。  
次回は来春を予定しております。



\*

成田豊人氏から、『祖母論』『め！』の二冊の詩集を頂戴した。

奥付も見ず、作品を読み進めた。最初に感じたのは、険しく切り立った頂を天に突き立て、雄々しくそびえ立っているような、そんな作風に心をそそられた。初出一覧によると、二十代後半から三十代後半にかけての作品を収録。生命力をみなぎらせた作品の多くは、全精力を傾注した若さの象徴といえるのではないだろうか。

さらに、成田氏は教職に就いていたことから考えると、自らにタブーを作らないで書き進めていたのではないか、芸術に壁はないと割り切っていたのではないか、などと考えた。

精神の冴えを示す青春期に詩と向き合っておられた、かつ思慮深く、透徹した詩論をおもちの成田氏に、今後とも指導を仰ぎたいと思った。

\*

「個人誌の空間」の特集が組まれているからと、駒木田鶴子氏から、『詩と思想』⑩をお借りした。

発行形態も編集も違う、十五名の方々の個人誌が紹介されていた。自身の存在証明やコンセプトの揭示に特徴がみられた。誌のネーミングも面白い。

一滴の言葉の雫から展開する個人誌。言葉の磁場を醸成していく場、自分との対話ととらえている人、あくまでも個人による誌であることに基本概念をおく人などなど、多様であった。

「ピッタインダウン」は、すべて一人での個人誌。どう書こうが、いつ発行しようが、自己責任のもとで自由。経費の関係で発行部数は少ないが、詩に救われた者の一人としては、つたない言の葉の一つでもだれかの心に届けばいいなと考えている。

【ご案内】

矢代レイ・政岡悦子 詩・絵手紙展

十一月六日（月）～三十日（木）

午前九時～午後三時

秋田銀行御野場支店

無料

ぜひご覧ください

\*

今年も残すところ一ヶ月余りとなった。「ピッタインダウン」も創刊から二年七ヶ月。これからも心新たに詩作に精進して参りますので、どうぞ来年もよろしくお願い申し上げます。

よいお年をお迎えください。

